魔界

西村寿行

魔界

西村寿行

昭和五十三年四月二十日　初版発行
昭和五十三年五月三十日　三版発行
発行者——角川春樹
発行所——株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二—十三—三
電話〈〇三〉二六五—七一一一〈大代表〉
〒一〇二　振替 東京三-一九五二〇八

魔界　西村寿行

印刷所——暁印刷株式会社
製本所——大口製本印刷株式会社
落丁・乱丁本はお取替えいたします
© Jukō Nishimura, 1978
Printed in Japan
0093-872216-0946(0)

目次

黒い血の果て――――――三
異常者――――――六一
忍びよる闇――――――一一七
百年の追跡――――――一五九
残　像――――――二〇五

装幀　門田ヒロ嗣
写真提供　ユニフォトプレス

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

黒い血の果て

1

そのオートバイは路の左側の細い路地から、いきなり走り出てきた。道路の中ほどに出て右に折れようとして、小石でもはねたのか横だおしになりかけ、そのまま道路の中央にのめり込んだ。遠野はハンドルを握りしめた。とっさのことで急ブレーキは間に合わなかった。ヘッドライトに捉えられたオートバイの若い男の顔が一瞬、ゆがんだのがみえた。迫りくる乗用車を巨大な怪物でもみるようにのけぞり、何かを叫んだ。

ブレーキの軋みと、若い男の叫びと、衝突音が同時に起こった。冷たい、氷の矢のようなものが遠野の背筋をつらぬいた。若い男の体がオートバイから浮き上がって、まるで重力を断ち切ったようにフロントグラスの中を夜空に舞い上がったのがみえた。ひどくゆっくりと舞い上がった。若い男の姿はいったんフロントグラスの上端から消えて、かなり離れた右の路肩にドサッと重い音をたてて落下した。

遠野は夢中で車を出た。男に近寄ってみた。男は動かなかった。道路の縁石に頭を打ち当てていた。かすかな街灯の明りに縁石を染めはじめた黒い液体がみえる。

遠野は周囲を見回した。すぐ近くに乳業の工場がある。工場は寝静まっていた。片側は疎水があっ

て林になっていた。どこにも人影はない。幹線と幹線に挟まれた道路で、夜半近い時刻では通行車もとだえがちな場所であった。

遠野は車に乗った。ふるえる手足でどうにか車を発進させた。車は痛手を受けたように一、二度、妙な横滑りをみせてから走りだした。遠野はアクセルを踏み込んだ。喉がひきつれた感じになっていた。バックミラーをのぞいたが、追ってくる車の姿はない。五分も走れば幹線に出る。そこには無数の車が行き交っているはずだ。その中にまぎれ込むことだ。

追跡車の気配もない背後の闇から、引き戻そうとする目にみえない闇の触手が幾本も伸びて、ともすればそれに車ごとからめとられそうな恐怖を、遠野は感じた。

〈おれが悪いんじゃない〉

ひからびた声でつぶやいた。

〈悪いのはやつだ。やつは一時停車して待つべきだったのだ。それを、いきなり横路からとび出してきた。まるで自殺じゃないか。被害者はむしろおれなのだ〉

幹線に出た。上下線ともかなりの車が流れていた。下り車線の流れの中に車を割り込ませて、遠野は額の汗を拭いた。逃げおおせたという安堵感がねばい汗に混じっていた。しかし、掌をズボンにこすりつけていた動きが、ふいに力を失った。

若い男が道路の縁石に頭を砕いて即死したらしいのを知り、逃げることに夢中のあまり、遠野は車の被害状況を調べてないことに気づいた。

――不審訊問！

あわててライトの光芒をみた。ライトは両方とも正常だった。もしライトが壊れていて、それを知

らずに走っていたとしたら？　警官の不審訊問を想定すると、遠野は体のこごえそうな気がした。たんに過失致死だけではなく、遺棄罪とか、まだ生きていたとすれば未必の故意とかのそうした刑法用語が心の中にするどい矢を打ち込みはじめていた。

遠野は車の速度を落とした。ライトは正常だが、フェンダーやその他に目立つ損傷があれば、警官の目にとまりやすい。それに、あの通りはめったに車が入らないが、もし入ったとすれば通報を受けた警察はただちに一斉検問をはじめるにちがいない。

遠野の自宅は東村山市だった。田無市を出たばかりだから、あと二十分もあれば自宅に戻れる。検問の気配はまだない。この間に突っ走るか――しかし、遠野は車を停めざるを得なかった。損傷をみたとてどうなるわけではなかったが、いつ警官の不審訊問に遭うかと思うと、調べて納得しないわけにはいかない。

車はバンパーが曲がって、右側のフェンダーに先端が喰い込んでいた。わずかにフロントグリルの辺りが陥没している。ラジエータグリル部分にもくぼみがある。しかし、そのていどだった。思ったよりも損壊はすくない。遠野は体全体で吐息をつくような安堵をもらした。これなら一斉検問がないかぎり、だれに怪しまれることもない。

車を発進させた。心に落ち着きが戻りかけていた。このまま、一斉検問がなく帰れたとして、どう対策をたてればよいのか。おそらくあの若者の死体は今夜中には発見され、轢き逃げ捜査班が捜査を始める。急ブレーキのタイヤ痕、フェンダー塗料、車体から落ちた泥の分析、そして先方のオートバイに接触したバンパーの微小な皺金――ガラス類に損傷はないから、捜査班が入手できる資料はそのていどのものだ。

遠野は愁眉を開いた。遠野は警視庁の交通課に友人がいた。年に一、二度は会って酒を飲む。その折りに轢き逃げ捜査のむずかしいのを聞いたことがあった。塗料の一部やガラス片から車種を割り出すことはできても、その車種の持ち主全員を当たることは容易なことではなく、その間に修理をされてしまえばお手上げになるという。問題はタイヤ痕だが、これもタイヤ交換されてしまえばどうにもならない。しかし、人をはねたばあいは毛髪や血痕が残ることがあり、いいかげんな洗車では痕跡を消してしまうことができず、ルミノール反応などで血液の検出ができるから、それが決め手になるという。

遠野は直接、男をはねたのではなかった。オートバイに激突し、男はその衝撃で頭上に舞い、縁石に叩きつけられたのだ。血痕や毛髪、また衣服の付着しているおそれはなかった。修理とタイヤ交換を急げば、痕跡は消してしまえる。幸い、遠野の車はタイヤ交換をしてもおかしくはない走行距離がメーターに出ていたし、タイヤはいまの車に買い替える前の車の交換タイヤが車庫の隅に積んであった。遠野の妻の実家が長野県で果樹園をしており、霜除けに古タイヤを果樹園のあちこちで燃すので、訪問するときに持って行く予定で取ってあったのだった。

尾行者らしい車はなく、一斉検問の気配もなかった。遠野はバックミラーに映った自分のおびえた険しい相をむりにゆるめた。眼鏡の奥の目が三角形をしていて、つねでさえ相は険しいのである。しかし、遠野はこれまでその相を四十なかばに達した男の一種の威厳だと思っていた。わけのわからない若者の傍若無人な運転にまき込まれて、ここまで営々と築いてきた地位を捨てることはたまらなかった。なんとしてでも証拠を消してしまわねばならない。自身の顔の険しいのをみて、遠野はそれを強く感じた。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

自宅の周りは武蔵野のなごりのくぬぎ林が取り巻いていた。最近、宅地として売りはじめた山林で、家はまだ疎らだった。遠野は都心の家を売って広い宅地を手に入れるためにここに移ったのであった。庭が六十坪ばかりある。日本庭園を造るために運んできた庭石の使い残りが道路際に転がしてあった。その中の適当な石に遠野は車を走らせた。ハンドルをしっかり握りしめ、かなりなスピードで車を激突させた。バンパーからフロントグリル全体がぶち当たって、大きな音がした。降りてみた。オートバイをはねた痕は新しい大きな傷の中に消えてしまっていた。

2

夜明けを待って、遠野はタイヤ交換をして、鈑金工場に車を走らせた。エンジン修理と鈑金を兼ねた個人経営の工場である。二度ほど修理に立ち寄って経営者とは顔なじみであった。

「家の前できちがいトラックをよけそこねてね、石に激突してしまったんだ。お恥ずかしい話だがね」

遠野は苦笑してみせた。

「災難でしたね。で、保険は？」

まだ若い野田という経営者は、愛想笑いをした。

「対物には加入していないんだ。修理代は高くてもいい、すぐにかかってくれないか。明後日にはどうしても必要なんだ」

「それァ無理ですよ。塗装が……」

「いや、塗装はまた暇をみてやるよ」
強引に押しつけた。ともかくすぐ修理にかかれば、今日中に、警察が調べにくるにしてもそれまでには痕跡はなくなっているのだ。
「承知しました」
律義そうな野田は愛想笑いを消さずにいった。
いの一番に取りかかるように念を押して、遠野は工場を出た。タクシーを拾って自宅に向かった。これで痕跡はなくなる。タイヤの後始末さえすれば、警察が調べにくるころにはフェンダーからバンパーは取り外され、焼かれて叩き出されていよう。かりに不審を抱いたところでどうにもなりはしない。
――どこかに手落ちはないか。
どこにも手ぬかりはなかった。さんざん考えた末の処置である。万事はうまくいくはずであった。
自宅の近くまできて遠野は、激しい鼓動の高鳴りをおぼえた。数人の男が道端にある庭石の前に立っていた。そのうちの何人かは体をかがめて石を調べている様子だった。
――警察！
そのまま車を停めないで突っ走るよう、運転手にいおうとして、遠野は開きかけた口を閉じた。男たちの姿が視野に大きくなって、それが自分の部下であるのがわかった。おびえの血栓に塞がりかけていた血が、にわかに動きだしたのがわかった。
小金井にあるカントリークラブにゴルフに行く約束だったのを、遠野は思いだした。
タクシーから降りた遠野を、男たちが取り囲んだ。

「もう迎えにきてくれたのか」
遠野は如才なくいった。
「車の運転はもうやめていただきますよ、部長！」
最初に口を切ったのは、次長の佐藤だった。怒ったような口調だ。三十を過ぎたばかりのインテリ臭に包まれた男だ。遠野はてれかくしのような笑いでそれに答えた。怒ったようなものいいの中に含まれた佐藤のことばだけのみえすいた阿りも、今日ばかりは気にならなかった。
「これだからな、面倒みきれねえや」
そういったのは岩川だった。歯に衣を着せない男である。部員の中ではもっとも硬派というか、粗野な男だった。
「バカをいえ。おれの技術が悪いのではなくてだな、トラックが悪いのだ」
朝刊には事故のことは出てなかった。それが遠野のギコチなさを救った。道路に出て、トラックの横暴な運転ぶりを手ぶりで説明した。説明しているうちに、自分でも思わずまぼろしのトラックへのやるかたない忿懣を表情に浮かべていることに気づいた。無謀な運転で道路にとび出てきたオートバイの若者への非難でもあった。
「それにしても、石にぶつけることはねえや」
岩川は笑った。岩川の笑いの中には、そのていどでよかったという安心感のようなものがこもっていた。
「まあな。それはともかく、おれは今日は悪いけどゴルフはよすよ。一応、医師に診てもらうことにする。君たちだけで行ってくれ」

医師にかかる必要はないが、交換したタイヤを始末しなければならない。始末に時間はかからないにしても、はねた男の生死もわからないままではゴルフに興じる気にはなれなかった。

「そのほうがいいですよ。万一、むち打ちでもあると大変だから。ぼくも今日はゴルフはよします。部長がいないのでは張り合いがないですからね」

佐藤がいった。部長第一主義、肚はともかく、ことばと行動はいつもそうだ。阿りととられようが、そんなことは気にしない男だ。

遠野は賑やかに出て行く一同を見送った。

午前中にタイヤを始末した。指紋を拭き取って、レンタカーで八王子郊外の山中に運んで捨てた。かりに捨てたタイヤが何かで発見され、轢き逃げ車のものだとわかったとしても、警察は持ち主を辿ることはできない。いくら科学捜査が発達したといってもそんなことは可能ではないのだ。鈑金屋が約束通り修理に着手しさえすれば、証拠は何一つ残らない。遠野は安全であった。

幸運だったと、遠野は思った。衝突時に目撃者がなかったこと。接触したのがバンパーだけで、走るに支障がなく、不審訊問の対象にならずに済んだこと。交換タイヤのあったこと——その中のどれか一つが欠けていても、おそろしい結果を引き起こしたかもしれない。交通事故であろうと、人を殺したことにはちがいない。逮捕されていれば、非はオートバイの男にあるとはいうものの、警察が実地検分をし、衝突した位置などを計測すれば、結果はどう出るかわかりはしないのだ。警察が計るのは距離とかスピードなどであって、そのときの運転者の感情とかそうしたものは考慮されない。オートバイが道路に出たのが直前か、前から出ていたのか、それすらもわかりはしないのだ。たんなる計測では正邪に逆の結果が出ないともいえない。そんなことになってはたまったものではないのである。

莫大な賠償を要求され、交通刑務所に入り、その上に社会的な信用を失ってしまう。無謀な一人の若者と路上で行き遇った、ただそれだけのことで遠野は人生を失いたくはなかった。

――だが、もう心配はない。

遠野は自身に向かってつぶやいた。

午後おそく、駅に出た。

夕刊に記事が出ていた。

やはり若者は即死していた。白瀬浩（しらせひろし）という十九歳の青年であった。発見は午前三時となっていた。轢き逃げ捜査班が投入されて、轢き逃げ車の割り出しに全力を挙げているとある。記事はてがかりのすくないことから、捜査の難航を匂わせていた。乗用車のらしいタイヤ痕が残っていたのと、塗料の微片があっただけで、車種割り出しの決めてになるガラス等の破片は皆無だとある。

記事を読んで、遠野は安心した。

あらためて運のよかったことを思った。逆に若者には運がなかったのだ。放り上げられても擦り傷で済むばあいもあるものを、縁石に頭から打ち当てたのは運がなかったとしかいいようがない。

死んだのは気のどくだが、それについて遠野は道義的な悩みを持つことはなかった。若者の側に非はあるのだし、いまさら遠野が名乗り出ようが、死んだ者は還らない。

駅を出て、喫茶店に入った。冷房がよくきいていた。遠野は今が夏の盛りなのにふと気づいた。昨夜から暑さを忘れていた。暑さには弱いはずなのが、今朝からほとんど汗をかいたおぼえがなかった。

冷たいコーヒーを取った。飲もうと口に近づけたとき、ふとコーヒーの液面に男の顔が浮いた。おびえにゆがんでのけぞった若者の青白い顔だった。遠野はコーヒーを置いた。顔はもう消えていた。

何がなし、遠野は悪いことの起こりそうな感じを受けた。若者の顔は記憶の投影であった。なまなましさがまだ残っていて、それが揺曳しているのだ。実際に液面にみたのか、記憶の中の揺曳がそう思わせたのかはさだかでないが、ともかく、みたことになんのふしぎはないのだ。

にもかかわらず、遠野は、浮かんだ像が何かを暗示して消えたように思った。

席を立って遠野は赤電話に近づいた。電話帳で鈑金屋を調べ、電話をかけてみた。不安があるとすれば鈑金屋だけであった。だが、あれほど念を押してあるのだから、真っ先に修理にかかっているはずであった。

電話が通じた。

二言三言、話をして、遠野は電話を切った。席に戻る足がふらついた。

――防犯協会員！

電話に出た鈑金工場の野田は、今朝、遠野が車を置いて帰ってから間もなく、防犯協会員だと名乗る男の訪問を受けた。サングラスをかけた中年のきさくな男で、カメラを持っていた。轢き逃げ車の手配を警察から依頼され、各自が地元の鈑金工場を回っているのだという。このくそ暑いのに――とつぶやきながら、遠野の車をみて、事故内容を訊き、念のためにといって損傷部分をカメラに納めて帰ったという。

遠野は両手を握り合わせたまま、あらぬかなたを見ていた。何も見えなかった。視界の中からはいつの間にか色彩が消え、灰色のモノトーンに塗りつぶされていた。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo